

住宅建築は大原から着工することに決まったものの、初めての仕事であるから誰も自信がなく不安なため、先に希望する者がいないので、最初の家は抽選で井上敬吉君の家に決定した。

ところで、本人が自宅のブロック積に着手したものの素人が習ったばかりだからなかなか真っ直ぐに積みなくて、終わって見ると後悔する仕事がしばらく続いたようで、現在倉庫に使用している開拓第一号住宅を眺め、当時の苦労を思い出して本人も苦笑している。

そのうち一緒に働いている間に他の組合員も見よう見まねで経験を重ね、技術を覚えたので、三十四年の大水害で流作地区の建物が全半壊した災害復旧工事とともに三十五年秋頃に着工した個人住宅のブロック積作業は、短期間で二十一戸

### 三 組合の医療および共済制度

大八洲開拓団時代の満洲開拓の僻地においては時たま医療施設があってもなかなか医者に来てがけない。また、定着してもらえない。なおさら小さい開拓組織では外部から医師を迎え入れることは難しいと考え、団員の中から医師を養成するため、最初はともかく看護の修得でもと思い、本人からも希望した加藤恒夫君を当時の弥栄村病院長藤巻新蔵先生にお願

の新築住宅を見事に完成することができた。

建設工事は、組合員の共同作業をはじめ大工仕事もブロックと瓦の生産も組合員の手で進めたので、建築費の大半が材料代で済んだため、住宅一戸当たり価格は二十五万円以内で組合員に譲渡することができた。

その当時、政府から昭和三十四年から三ヶ年にわたり住宅補助金を五百三十三万四千六百円の交付を受けたほか、建設資金は各種借入金と組合事業のやり繰り算段でなんとか切り抜け、七十数戸の第一期住宅建築を完了したので、三十七年には全組合員が長年の仮住まいから脱却し、久々振りに家族揃って家庭生活の本当の喜びを分かちあうことができたのである。

いして看護見習生として病院に御世話いただくことになった。

ところが、間もなく先生が急逝されたので、先生の奥様の御世話で、佳木斯医科大学の形態学教室の宮本先生の助手として医大に勤めるうち、はからずも昭和十七年に入学することになり、在学中に終戦を迎え、学校を引揚げ長春にて避難生活を送っているうちに医大を卒業したかたちとなり、団員

一行と帰国した後、再び九州医大で勉学を続け医師の資格を得て、本人も大八洲開拓にとっても嬉しい宿願達成の日を迎えることができた。

終戦後開拓地を出てから二カ月の間、避難中には多数の犠牲者を出し、生き残った者も栄養失調と疲労によりやせ衰えた体で長春で十カ月の越冬生活を続ける中で、さらに家族たちを亡くし、元気を回復しないまま女子供の多い集団が引き上げ、再入植えと休養する暇もなく無理をとおしてきた体にも限界が来て、入植して一応は落ち着いたとはいえ引続く貧しい生活で養生もできず、栄養不足と過労が重なり病人の絶えることがなかった。

健康な者は働かねばならず、病人の十分な看護もできない上、経済的余裕もないから重病でない限り医者に診てもらおうこともできない。さらに入院が必要な患者も宿舎で床につい

ているのが精一杯で、手の施す術がなかったといっても過言でない開拓地の状態であった。

そうした頃の昭和二十二年七月、待ちに待っていた加藤医師が開拓地に移住してきたので、取り敢えず天幕生活の中で組合員の保健医療に携わるかたわら地元患者の診療にも当たった。

しかし、開業したというものの診療の設備は名ばかりで、加藤医師も大変な中で、医療設備の整った他の医院や病院の医師と連絡を密にして患者の処置には手落ちなく対処してきた。

また、当時の開拓は無理に手術等をお願いしても金も支払えなくて、水海道市の佐藤先生（佐藤外科）には無料で診てもらった時代が数年も続いたこともあった。入植当時の組合は、組合員の食生活に追われていた頃だから、診療所に回る

金がないため、加藤医師は診療所経営に大変な苦勞をしたのみならず、組合は資金的援助を受ける始末であった。

そのうち、昭和二十二年九月の水害で流れ込んだ流木を拾い集めて浅間山地区に建築した共同宿舎の一室に天幕か



大八洲開拓団がお世話になった  
第1次開拓村・弥栄病院長  
藤巻新蔵先生御夫妻と康子様  
(昭和11年11月、病院に着任の頃)



同上 藤巻新蔵先生  
昭和15年5月6日急逝 享年46歳





大八洲開拓診療所 昭和22年に建てた浅間山共同宿舎の一部を使用した最初の診療所（後方右より2人目加藤医師）



28年11月に新築した診療所にて



ら診療所を移して診療を続け、昭和二十八年十一月にようやく診療所を新築して組合の医療も体勢を少々整備することを得た。地元の患者からも好評を受け加藤医師はますます忙しくなっていた。

しかし、未だ不治の病とされた結核患者と敗戦以来長い間の異常な環境の下で蝕まれ衰弱してきた体はついに恢復の日が訪れることなくして、これまでに加藤医師の懸命な診療を続けてきた努力も空しく在任中に六名の患者が亡くなったことは余りにも残念である。

開拓事業は健全な体力による活動が基本であり、そのためには大八洲開拓にはなくてはならない加藤医師も子息の教育の事情により昭和三十三年三月から開拓を離れ、東京都内に移住し開業することになった。

それから数年後に組合では開拓婦人ホーム（兼組合事務所）の建設に着工し、昭和四十年に竣工したので、これを機会に開業医の忙しい中を月に数回出張して再び組合員の健康診断を十六年間続けてもらった。

昭和三十年代から結核にかわり癌の死亡率が次第に増えてまいり、中でも胃癌の死亡者が多く癌の早期発見が重要視されてきたのにもない、組合員も癌の発生度が高いといわれる年齢に達してきたので、加藤医師の計らいで所属する板橋区医師会病院のレントゲン車並びに検診課のレントゲン技師

組合集団検診  
昭和50年12月24日  
レントゲン技師とともに



同・平成3年12月23日  
東京都板橋区医師会病院検診車



の派遣を受け、胃部間接撮影の組合集団検診を昭和四十四年に開始、以来今日にわたり実施している。撮影したレントゲン写真は加藤医師が自ら診断して精密検査を要するものは再検査を受け、その結果医療または手術の治療が必要な患者は早急に医師会病院に入院させる等の処置を講じてきた。

このようにして早期発見により手術を受けた組合員の患者は数名にもなったが、生命を救われて現在にいたって元気である。



## 組合葬



故後藤武さんの組合葬  
昭和49年3月26日、佐藤組合長の焼香  
(於：素住台公民館)



故今井一郎さんの組合葬  
昭和51年8月16日、佐藤組合長及び遺族の挨拶  
(於：素住台公民館)



故高橋アヤ子さんの組合葬  
平成8年7月23日、導師無量寺日下大隆師  
(於：浅間山公民館)

組合はその他、組合員および家族の病氣治療に関しては昭和三十六年に共済規約を設けて、共済事業資金の一部に共済賦課金を徴収して、入院費の全額と通院治療費の国民健康保険による三割負担分を共済給付金として支給するとともに、冠婚葬祭に關しても費用の一部を組合と各地区の組合員が負担して相互扶助をはかるとともに簡素化を進めてきた。

集団検診開始以来平成八年までに組合員の受診者は延べ三千百九十二名を数えるにいたった。最近では少なくとも年一回の検診は組合員も常識に思っただけでもこうした機会でもない健康でいるとなかなか受診しないので、今後も続けて

いきたいと考えている。

なお、共済規約は昭和六十一年に共済規程に改正し、平成六年には更に一部を変更して運用している。

最後に、東京に移住した加藤医師が平成七年の九月から守谷町に戻って開業することになったので、組合員は加藤医師を近くに迎え再び診察並びに健康相談を受けることができるようになったことを大変心強く喜んでいる次第である。